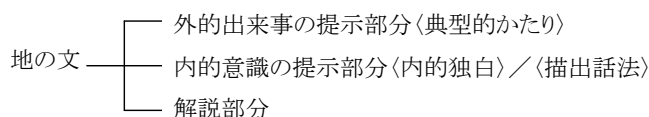


引用文の伝達部における視点と話法

顧 那

0. はじめに

文学作品の中の語り手による解説や描写は「地の文」と呼ばれる。宮坂(1955:14)は、地の文について「表現者がその特定の構想を時間の流れに従って線条的にくりひろげてゆく部分である。表現者は、ある距離をもって一つ一つの場面を叙述し、場面から場面への移行を説明する」と述べている。これはつまり、地の文は語り手によって語られる部分だという考えである。しかし、地の文の中に作中人物の内的独白が存在しうることを考えれば、地の文はすべて語り手による叙述ではないことが明らかであろう。現に工藤(1995:195)は、テンス形式を分析するために、地の文の内部構造を次のように分けている。



小説において、作中人物の思考や発話内容を伝える部分は、かぎ括弧などによって地の文から明白に区別されることもあれば、工藤が図に示したように、地の文に溶け込んでいることもしばしばある。本稿では、日本語と中国語の文学作品を分析対象として、地の文における引用文の伝達部、すなわち「…と思った」、「…と言った」のような表現に焦点を当てる。地の文におけるこのような伝達部はすべて、語り手の視点によるものだと見なされがちであるが、必ずしもそうではない。本稿では、伝達部が語り手と作中人物のいずれの視点によるものかを考察することによって、伝達部における視点と話法との関係を明らかにするとともに、日本語の場合、自由直接話法と自由間接話法にも伝達部が存在しうることを指摘する。

顧那

1. 伝達部について

これまでの日本語の引用研究は、被伝達部および伝達動詞について統語論、文体論、語用論などさまざまな角度からなされてきた。一方、中国語の場合、引用に対する関心は日本語の場合ほど大きくないが、被伝達部についての統語面からの考察以外に、伝達動詞の種類、動詞が伝達動詞として用いられる条件など、伝達部に関する研究も見られる。しかし、先行研究による豊富な蓄積があるにもかかわらず、管見の限り、地の文における引用文の伝達部を語り手の視点という角度から考察した研究は皆無と言ってよいだろう。伝達部を取り上げて論じている研究のうち、語り手の介入に触れているのは豊田(1993)の一篇しかない。しかし、豊田は英語の小説しか取り上げておらず、分析対象も会話部分の伝達部に限定されている。

本節では、まず日本語および中国語の引用関係の先行研究を踏まえながら、本稿で問題にしている伝達部とはどういうものかを確認しておく。

1.1 伝達部とは

1.1.1 日本語の場合

砂川(1987:73)によれば、一般に引用文と呼ばれているものは、典型的には、引用句と引用動詞と引用動詞の主格補語の連なりとして表現されるという。

[主格補語]が／は+[引用句]と+[引用動詞]
↓ ↓ ↓
彼は 僕は無実だと 言った

ここに示された「引用動詞」を本稿では「伝達動詞」と呼ぶ。¹そして、引用を示す標識「と」、主語、伝達動詞の部分が本稿で言うところの「伝達部」であり、伝達部によって伝達される部分、つまり思考や発話の内容を伝える部分が「被伝達部」である。なお、伝達部には、主語が明示されないこともあれば、伝達動詞を修飾する副詞(句・節)が付加されることもある。

¹ 藤田(1986:207)が指摘するように、日本語には、「おはよう鈴木が入ってきた」のように思考・認知・発話などを意味する動詞でない動詞でも、「と」を伴って使われることがある。本稿では、そのような表現を分析対象から外した。そして、伝達動詞の種類を「言う」や「囁く」などのような発話行為にかかわる動詞と「思う」、「信じる」などのような思考行為にかかわる動詞に限定して、考察を進める。

1.1.2 中国語の場合

中国語の文法書において「引用」を取り立てて論じるものは、劉・潘・故(1983:380)が「说(言う)」や「想(思う)」などのような発話や思考の内容を伝える動詞は「主述フレーズの目的語が取れる」と述べている以外に見当たらない。この「主述フレーズの目的語が取れる」というのは、「被伝達部が文の形で伝達動詞の目的語となりうる」ということであるが、本稿ではこの考え方を認めながらも、日本語の場合と用語を統一して、主語、伝達動詞、² 伝達動詞を修飾する副詞(句・節)の部分を「伝達部」と呼び、思考や発話内容を伝える目的語の部分を「被伝達部」と呼ぶ。³ 言うまでもないが、伝達部において主語がしばしば省略されるのは日本語の場合と同様である。

1.2 小説に見られる伝達部

1.2.1 日本語の場合

日本語の場合、伝達動詞は、そのすべての例において引用標識の「と」を伴っているわけではない。⁴ 次の(1)と(2)は「と」を伴った典型的な引用の例である。

- (1) 私は、チロのためにも、このことは他言すまいと決意した。(『晩年』 p.12)
- (2) 金剣宮を探しているのかしら、と千桐は考えた。(『透光』 p.15)

次の(3)は事情がやや複雑である。

- (3) いまここに在るのは、と彼は思った。世間の荒波をくぐり抜けてきたとか、現実を知ったとか、人生を学んだ、老いた、墮落した、そういった一切の騒々しい説明とは遠い、しんと静かな、しかし熱い感情のかたまり。時間そのもの。時間をもたらしたのもの。あえて言えば、と乱れかけた呼吸をとめて自分に囁く。

² 中国語に関しても、日本語の場合と同様に、伝達動詞の種類を発話行為と思考行為にかかわる動詞に限定して、論を進める。

³ 申(1998)によれば、中国語では、「被伝達部」に当たる用語は“转述语”、「伝達動詞」に当たる用語は“引导动词”、「伝達部」に当たる用語は“引导句”である。

⁴ 「と」の構文的扱いについて、「と」を格助詞と見なす立場と副詞句を標示するものとする立場がある。それらの立場の違いについては、鎌田(2000:29-41)が詳しい。本稿では、「と」が引用を示す標識として用いられる典型的な引用形式を分析対象としているので、「引用標識」という用語を使用する。

顧那

うっすらとしたかなしみ。うっすらとした、しかし絶対的なかなしみ。

(『透光』 p.41)

この例の場合、下線部の「と彼は思った」、「と……囁く」という伝達部に導かれているのは、それぞれ「いまここに在るのは」、「あえて言えば」という部分だけのように見えるかもしれないが、これら二つの節の後に読点の「、」が使用されていることから知られるように、文はそこで完結していない。伝達部によって区切られているとはいえ、伝達部の前後の部分は意味的に一つのまとまりをなしているもので、伝達部の後ろの部分も被伝達部の一部として認めるのが妥当であろう。

次に、引用標識の「と」を伴っていない例を示す。

- (4) それを見て仕事仲間は、ひそひそ声でこう言った。
また郷ちゃん、目え開けて眠ってる。(『透光』 p.8)
- (5) 昨日は幸福だった。そして、一週間前も幸福だった。それでは一年前は、どうだっただろう。ココは、しばらく考える。幸福だったと言うしかないだろう。それは、つかみ取ることの不可能な実感のない幸福ではあったが。(『トラ』 p.7)

これらの例の場合、発話や思考内容を伝える点線の部分が、動詞を含む下線部から独立しているため、下線部は伝達部ではなく、単なる説明にすぎない。

なお付言しておく、発言内容や思考内容を伝達する際の表現方式として、「～と」形式以外に、「～ことを(希望する)」「～かどうか」形式の名詞句、「～ように(思われる)」「ありがたく(感じた)」などの副詞的修飾語、「感謝を(感じた)」のように対格補語として取り込まれた感情名詞、「～そうだ」のような伝聞表現などを挙げている研究も見られるが、⁵ 本稿では、このような「と」を伴わない話法形式を考察対象から外している。⁶

1.2.2 中国語の場合

中国語には日本語の「と」に相当する形態は存在しないが、引用を示す標識として「:」や“ ”のような記号がよく用いられる。次は、中国語小説の地の文における思考や

⁵ 詳しくは、砂川(1989)、鎌田(2000)、藤田(2000)、松木(2001)などで論じられている。

⁶ こうする理由は、メイナード(1997: 149)でも指摘されているように、「～ことを」などの形式でなされる引用に比べて、「～と」形式の引用のほうが複数の視点を表現することができることにある。

発話の引用の例である。⁷

- (6) 吉喜想, 一个渔妇如果不会捕鱼, 制干菜、晒鱼干、酿酒、织网, 而只是会生孩子, 那又有什么可爱呢? (《逝川》 p.6)
 漁村の女が魚もとれず、乾燥野菜も作れず、魚の干物も作れず、酒も造れず、網も編めず、ただ子どもを生むしか能がないとしたら、そんな女のどこがよいか、と吉喜は思った。(p.37)
- (7) 她赢了个好人缘, 连更衣室的值班大妈都夸她: 别看咱们饭店净漂亮姐儿, 我还就瞧着白大省顺眼。 (《永远》 p.26)
 白大省は人付き合いがよく、更衣室の当直のおばさんにまで褒められた。うちのホテルにはきれいな娘がいるだけじゃないよ、あたしゃ白大省が気に入ったね。(p.90)

上の(7)のように、中国語の場合、直接話法であっても、直接引用であることを示す「“”」は必ずしも必要ではない。また、次のように、伝達動詞のみで引用を示す例もよく見られる。

- (8) 我想我不如就下来吧, “世都”已经不远。 (《永远》 p.2)
 私はここで車を降りることにした。世都はもうすぐそこだ。(p.58)

上の(6)～(8)ではいずれも、点線の被伝達部が伝達動詞の目的語になっている。本稿で問題にするのは、このような表現である。次のように発話を意味する動詞と発話の再現部分の間に句点の「。」が用いられていて、発話の再現部分は動詞の目的語ではなくなっている表現は、考察の対象外である。

- (9) 房东一边忙活一边絮絮叨叨问李爱杰一些事。男人得的什么病呀, 家里几口人呀, 住几间房呀。 (《土豆》 p.30)
 家主は仕事の手を休めないで、あれこれと李愛傑に訊いた。つれあいはいどんな病気を患っているのか、家族は何人か、家はどれくらいの広さなのか。
 (p.157)

⁷ 中国語の例の後ろに日本語訳をつけ、訳本におけるページ数を示した。

顧那

1.3 自由直接話法と自由間接話法の伝達部

従来の研究では、自由直接話法と自由間接話法には伝達部がないという認識が主流になっている。⁸ここでは、伝達部の存在を認める寺倉(1995)と中川(1983)について概観し、問題点を指摘する。

1.3.1 寺倉(1995)

寺倉(1995:82-84)によれば、自由間接話法には伝達部があってもなくてもよい。そして、それがあつた場合、英語では文末に来ることも文中に来ることもあるが、日本語では、伝達部の「主語＋動詞」という連続した形が文末に来るのが自由間接話法の正規の構造であるという。

- (10) Oh no, she did not want to see him today, (Mary said/thought).
(寺倉 1995:81)
- (11) Oh no, Mary said/thought, shi did not want to see him today. (同 p.83)
- (12) 今日彼と会いたくない、とメリーは思った。(同 p.82)

英語の場合、伝達部が被伝達部の後、または文中に置かれていると、被伝達部が伝達部の従属節であることを示す‘that’が脱落する。そのため、被伝達部は伝達部の従属節ではなくなり、主文へと昇格する。(10)、(11)における‘Mary said/thought’の部分は、英語では「付加句」や「挿入句」と呼ばれており、直接話法や間接話法の伝達部とは異なる種類のものでされている。(10)、(11)のような例は、英語では自由間接話法として認められているようであるが、それらを日本語に訳した(12)も自由間接話法としてよいのであろうか。(12)は、引用標識の「と」が用いられているので、直接話法または間接話法として見なすのが妥当であると思われる。

寺倉は英語からの影響を強く受けているようである。寺倉が考えている日本語の自由間接話法の伝達部は、筆者の考えでは、直接話法または間接話法の伝達部にすぎない。

⁸ 日本語の自由間接話法には伝達部が存在しないという立場からの研究として、山田(1957)、松井(1983)、保坂・鈴木(1993)などがある。

1.3.2 中川 (1983)

中川(1983:224)は、「自由間接話法は伝達節のないものである。あってもそれは挿入句や付加句であるにすぎず、伝達される部分は独立していて、伝達動詞を補足する従属節ではないものである」と述べている。中川は、基本的には自由間接話法に伝達部が存在しないという立場を取っているようであるが、伝達部が挿入句となったり、文末に付加された論評節となったりして残るタイプもあることを指摘している。中川が言っている付加句として残っている伝達部というのは、たとえば次のような場合である。⁹

- (13) ①そんな恋人はやめて、俺と結婚しろと叔父さんは言った。②劇場には女優が沢山居る。③その男と結婚したら、真咲は年じゅう嫉妬の渦の中で生活しなくてはならない。④第一、男の収入が不安定だ。⑤身分も不安定だ。⑥一生貧乏暮しだ。⑦その男は今までも何度か女出入りがあったに違いない。⑧一体どこまで約束が進んでいるのか。⑨まだ口先だけの話だろう……と言う。(中川 1983:231)

中川(1983:232)は、(13)における「と言う」を付加的な語句となった伝達部としてとらえ、それによって(13)が自由間接話法であることは損なわれることはないと述べている。

(13)の場合、②の文からは作中人物「叔父」の発話の再現部分になっている。②～⑧の文を下線部の伝達部「と言う」から独立したものと見れば、②～⑧は自由直接話法または自由間接話法と見てよいであろう。しかし、筆者の考えでは、②～⑨は「と言う」によって導かれた被伝達部であり、伝達部に他に作中人物の視点による要素が入っていないければ、(13)は直接話法または間接話法にしかならない。

2. 語り手の視点から語られた伝達部

2.1 語り手自らの内面表出に用いられる伝達部

2.1.1 日本語の場合

地の文において、語り手によって語られる伝達部の大半は、作中人物の思考や発話内容を伝える時に用いられる。しかし、特に一人称小説の場合、語り手が前面に出て、

⁹ 文番号はすべて筆者による。

顧那

自らの考えを述べたりすることもある。次はそのような例である。

- (14) ①わたしは中学生の頃、ひねくれたかわいげのない子供だった。②クラスの男子と話をすることなどほとんどなかったし、わたしを一番の友達だと思ってくれる女の子も、たぶんいなかったと思う。(『紅茶』 p.22)

寺村(1984:228)は、「(……ト) 思う」という動詞は、主観性が強く、「文末で基本形で使われたときは常に話し手自身が『思う』ことを表わす」と述べている。ここで肝心なのは、下線部の「と思う」は語り手と作中人物¹⁰ のどちらによるテキストかを判断することである。(14)の②における被伝達部や直前に来る①の文末に過去形が用いられているところから、述べられている出来事は発話時点より以前に起きたものであることが分かる。要するに、(14)の②は語り手が過去の出来事を振り返りながら、それについて自らの現在の考えを述べている部分であり、伝達部の「と思う」は語り手によって語られたものである。

2.1.2 中国語の場合

中国語には時制が存在しないため、日本語の場合のように、思考・発話が実際行われた時間と話し手によって伝達された時間との関係を時制によって判断することができない。しかし、被伝達部が語り手の現在の内面の直接表出か、それとも作中人物の内面の再現かを、ダイクシス表現やコンテキストなどによって判別できる場合がある。次はそのような例である。

- (15) ①我接着要说的是另外一个孩子的舞蹈。②那是个非常美丽的小女孩，她叫赵文燕，就是一只燕子的意思。③我一直认为赵文燕就是文艺理论家蔡仪先生所指的典型形象，这灵感得自于我那时对赵文燕的印象。④我认为赵文燕很典型。(《伤心》 p.307)

次にもう一人の子供の踊りの話をしたい。それはとても美しい女の子だった。彼女の名は趙文燕、一羽のつばめという意味だ。わたしはずっと、趙文燕こそ文芸理論家の蔡儀先生の言う典型的な人物だと思っている。この思いつき

¹⁰ 一人称小説の場合、語り手は作中人物として出来事の中にも登場する。シュタンツェル(1979:56)は、一人称小説には語り手としての「私」を「語る私」、物語世界の中で出来事を体験する作中人物としての「私」を「体験する私」と呼んでいる。ここでは、用語の混乱を避けるために、一人称小説の場合についても、三人称小説の場合と統一して「語り手」と「作中人物」という用語を用いる。

はその頃わたしが趙文燕から得た印象から来ている。わたしは趙文燕が典型
だと思ふ。(p.17)

コンテキストを考慮しなければ、(15)における④は、語り手自らの内面の直接表出としても、語り手の視点によって伝達された作中人物の内面としても読み取れる。しかし、②と③に「那是(それ)」と「那时(その頃)」というダイクシス表現が用いられている。讚井(1988:15)が指摘しているように、「那」系列のダイクシスには回想の叙述という用法があるが、(15)はまさに語り手が語りの時間において過去を回想する部分である。このことは、①と②に強く滲み出ている語りの口調からもうかがえる。このように、ダイクシス表現やコンテキストなどの要素を考慮すれば、(15)の③と④は語り手が自らの考えを述べた部分であると見なされる。伝達部の「我一直认为(わたしはずっと…と思っている)」と「我认为(わたしは…と思う)」は、語り手の視点によって語られたものである。

2.2 作中人物の思考・発話が語り手によって伝達される場合

2.2.1 日本語の場合

作中人物の思考や発話が語り手によって伝達されることは、地の文において頻繁に見られる。そのような場合に使われる伝達部は、たとえば次の二例である。(16)は作中人物の思考内容を伝える例であり、(17)は作中人物の発話内容を伝える例である。

- (16) この電話番号は自分用で、事務所の番号とは別だと伝えてあったが、千桐は誰かに聞かれるのを恐れたのだろうか、と郷は考えた。こんなふうに変えることが出来たのもすべて……その次に何が入るのか、と彼は想像した。

(『透光』 pp.115-116)

- (17) 鶴来の駅前でタクシーを拾うという郷を、千桐は金沢まで送って行くと言った。

(同 p.42)

(16)と(17)における下線部の伝達部には語り手の視点による他称詞が用いられたり、語りの時間を基準軸とした過去形が用いられたりしているので、伝達部が完全に語り手の視点によるものであることが分かる。

では、人称詞は語り手と作中人物のいずれの視点によるものであるかの判別が難しい一人称小説の場合はどうであろうか。

顧那

- (18) 模型を支える台の横には、難しい漢字が並んでいた。きっと薬品会社の寄付か何かだったのだろう。しかし当時のわたしは、葉屋のおばさんが好きでこういう物を集めているのだと思っていた。こんな恐ろしい物を見つけてくるのだから、おばさんもさぞかし恐ろしい人なのだろうと思っていた。(『紅茶』 p.11)

一人称小説の場合、語り手の「私」が作中人物の「私」を指示する場合でも、また作中人物の「私」が自分のことを指示する場合でも、「私」という同一の人称詞を使用する。したがって、思考主として示された「私」という人称詞が語り手の視点によるものか作中人物の視点によるものかは、三人称小説の場合ほど明瞭ではない。しかし、(18)の場合、伝達動詞が過去形で用いられているため、被伝達部の思考表出は語りの時間を基準軸とした過去に行われたものであることが分かる。また、「当時のわたし」という表現からも知られるように、思考主の「わたし」は、語り手によって指示された作中人物の「わたし」である。このように、一人称小説においても、完全に語り手の視点による伝達部が存在する。

2.2.2 中国語の場合

中国語小説の地の文においても、語り手によって表現された作中人物の思考や発話の内容を表す部分が多く見られる。

- (19) 陈农这样想着就把自己振作了起来,关于鱼与米饭的仇恨化作了广阔的胸怀。陈农想,革命洪流就像巨大的岩石,而章孟达不过是鸡蛋,别看他现在圆滚滚饱凸凸的,说让他流汤他就得流汤。(《回廊》 p.150)
陳農はこう考えると気をとり直し、食べ物の恨みを壮大な想念へと昇華させた。彼は考えた。革命の奔流は巨大な岩石のようなものだが、章孟達は単なる鶏の卵にすぎない。奴が今、腹を満たし丸々と肥えているにしろ、俺がだめだと言えば奴は必ずだめになるんだ。(p.131)

中国語の場合、過去形によって語り手の視点を読み取ることはできないが、(19)のように、伝達部に用いられた他称詞から語り手の介入が感じられる。

では、伝達部に自称詞が用いられた場合、あるいは主語が明示されていないような場合には、語り手の視点を感じられないのであろうか。これについて、次の(20)と(21)で検討する。

- (20) 如果是一个上级这样对我说话, 我也许会认真地考虑考虑。我自己也感到, 现在的我与十几年前的我相比, 除了增加了不少个人得失恩怨外, 没有增加任何有价值的东西。(《人啊》 p.67)
- もし上級のだれかがそう言ったのなら、わしも真面目に受け止めたかも知れない。わしは自分でも、この十何年間、個人の得失と恨みつらみを積み重ねたほかに、価値あるものは何ひとつ身につけなかったと思う。(p.159)
- (21) 鴻漸胡扯道：“我路过，不进去了，”便转个弯回家。想这是撒一个玻璃质的谎，又脆薄，又明亮，汽车夫定在暗笑。(《围城》 p.99)
- 鴻漸はでまかせに、「ぼくは帰り道で、上がっちゃいけないさ」と答え、すぐ向きを変えて帰宅する。どうもこりゃガラス張りのうそをついて、こわれ易く、それに透明で、運転手はきつと腹の中で舌を出してる。(p.176)

(20)は思考主が自称詞で現れている例であり、(21)は思考主が明示されていない例である。ともに人称詞によっても時制によっても語り手の介入が読み取れない例である。それにもかかわらず、下線部の伝達部がやはり語り手によって語られた部分としてとらえられるのは、「感到(感じる)」や「想(思う)」のような思考内容を伝える伝達動詞そのものの客観性が高く、そこに語り手による外的な視点が感じられるからであろう。

2.3 伝達部における視点と話法の関係

2.1 で考察した伝達部は、語り手が語りの時間において自らの考えを述べる時に使用されるものである。それは語り手が自分の考えをそのまま表現している部分であるので、直接話法になる。

2.2 で考察した伝達部は、作中人物の思考や発話が語り手によって伝達される時に用いられる。被伝達部に現れる人称標識や時制標識などによって、作中人物の思考・発話内容が直接話法、間接話法、¹¹あるいは直接話法とも間接話法とも解釈されうるもの¹²になる。

¹¹ 本稿では、伝達部に焦点を当てて考察を進めるため、被伝達部が直接話法と間接話法のいずれになるかについての分析はしない。

¹² 日本語でも中国語でも、直接話法と間接話法との区別が明確ではないことが指摘されている。砂川(1989)は日本語の場合について詳しく論じており、中国語に関しては、原田(1991)と申(1998)の研究がある。本稿では、申(1998)の考えに従い、直接話法と間接話法とが明確に区別できないものを「直接話法とも間接話法とも解釈されうる」タイプとする。

顧那

このように、地の文における引用文の伝達部は、それが完全に語り手の視点によるものであれば、当該の思考・発話内容は直接話法または間接話法になる。

3. 作中人物の視点による伝達部

作中人物の視点による伝達部は、一人称小説によく見られる。

- (22) こんな屋上があるということにまだ気づいてない住民が多いから、というのが一番の理由だと思うが、もう一つ、ここで飛び降り自殺者が出たというのもこの場所の過疎化の大きな要因となっていると思われる。(『イン』 pp.27-28)
- (23) ①受験勉強シテル？②マッサカー私昨日九時ニ寝チャッタ、本当ダヨウダカラコンナニ元気ナノ。③じゃあその目の下の隈は何だと聞きたい。(同 p.6)

(22)は、屋上に通じる階段に腰をかけながらその場所にあまり人が来ない理由を考えている「私」の内面表出である。コンテキストからすれば、下線部の伝達部における現在形は作中人物の「私」が属する出来事の時間を基準軸とした時間表現として理解するのが自然であろう。したがって、伝達部の「と思う」や「と思われる」は作中人物の「私」の視点によるものであり、(22)は作中人物の内面が直接表出された部分である。そして(22)は、そこに語り手の存在が感じられないので、自由直接話法ということになる。

(23)における③は、①と②の友人による会話を聞いた作中人物の「私」の思考の直接表出として理解するのが自然であろう。寺村(1984:349)が言うように、感情を表す述語が現在形で終わる場合、その感じ手は常に話し手自身である。したがって、③における伝達部は作中人物によって発せられたものであり、③は自由直接話法ということになる。

作中人物の視点から語られた伝達部は、一人称小説だけではなく、三人称小説にも見出すことができる。次はそのような例である。

- (24) ①夫はちえ子の横顔を盗み見た。②ことが露見してから一年の間、すっかり板についてしまった姑息な動作だ。③まるで知れ切った嘘を隠そうとする子供のようだと思う。(『うら』 pp.204-205)

(24)の場合、②と③は作中人物の「ちえ子」が夫の盗み見る動作を見て感じたこととしてとらえられる。現在形の「思う」というのは話し手自身が思うことを表すので、伝達部の「と思う」は語り手によってではなく、「ちえ子」によって語られたものである。伝達部が存

在しているにもかかわらず、それが作中人物によるものであるため、語り手の介入が感じられない。したがって、②と③は作中人物の内面の直接的表出であり、自由直接話法ということになる。

一方、中国語の場合、2.2.2 で考察したように、伝達動詞そのものは客観性が強く、伝達動詞による語り手の介入が感じられる。したがって、(22)～(24)のような例は中国語の小説には見当たらない。

以上の考察から分かるように、思考や発話の内容を伝える伝達部は、完全に作中人物の視点によるものであれば、当該部分は自由直接話法になる。

本節で取り上げた伝達部は、作中人物の思考表出の全体を導くものである。¹³ (22)～(24)のような例は自由直接話法として認められるので、自由直接話法には伝達部が存在しないという従来の考えは改められなければならない。

4. 語り手と作中人物の視点が混在する伝達部

日本語の小説の場合、作中人物の思考を再現する部分の伝達部には、語り手の視点と作中人物の視点が混在しているように思われるものが存在する。それはたとえば次の(25)のような場合である。(25)は三人称童話における実例であり、(26)と(27)は比較のための作例である。

(25) 利恵は、この町はあずきのにえたつときのおいがするとおもう。

(『十三』 p.237)

(26) 利恵は、この町はあずきのにえたつときのおいがするとおもった。

¹³ 作中人物の視点による伝達部であっても、それが作中人物の思考・発話内容の全体を導くものではない場合もある。それはたとえば次のように、作中人物が他の作中人物の思考・発話を自分の思考・発話の中で再現する場合である。

外に出ると、妹は郵便ポストのプレートを見ろ、と顎をしゃくった。(林正児 涸子素美 羊子) 母の名前まで入っている。父はこの家を建てたことで母と一緒に暮らせるとも思っているのだろうか。

(『フル』 pp.15-16)

上の点線部分は、自由直接話法で表された作中人物「私」の内面表出であり、ここにおいて、「私」は別の作中人物「父」の考えを推測している。二重下線の伝達部「とも思っている」を発しているのは作中人物の「私」であるが、この伝達部は「私」の思考表出の全体を導くものではないので、言うまでもなく、自由直接話法の伝達部にはならない。

顧那

(27) この町はあずきのにえたつときのおいがするとおもう。

(25)の場合、伝達部は「利恵は……とおもう」になっている。作例の(26)に比べると、現在形の「おもう」のほうは語り手の介入が読み取れず、普通には、作中人物「利恵」の視点によるものとしてとらえられるであろう。一方、思考主は「利恵」という他称詞で表されているため、そこに語り手の視点を感じられる。このように、語り手の視点と作中人物の視点とが伝達部に混在しているため、(25)は自由間接話法ということになる。これに対して、(26)の伝達部は語り手によって語られたものであるため、(26)は直接話法である。そして(27)は、その伝達部に作中人物の視点しか感じられないので、自由直接話法ということになる。

周知のように、日本語の場合、「思う」や「～たい」のような感情述語が現在形で用いられる場合、その主語に人称制限がかかる。しかし、上の(25)のように人称制限が守られていない例は、文学作品には多く存在する。次の(28)も(25)と同じような例である。

(28) ①ジェフリーは舌を出して、ジェシーの部屋に駆け込んだ。②金髪がさらりと揺れて、まるで人形のようにだと、ココは思う。それも、この界限には、決して売っていない人形だ。(『トラ』 p.9)

(28)の場合、伝達部における思考主は、「ココ」という語り手の視点による他称詞で示されており、伝達動詞「思う」は作中人物の視点による現在形となっている。したがって、(28)も自由間接話法ということになる。

次の(29)は日本語の三人称童話における実例である。前掲(25)と(28)とは少し性質が異なるが、やはり自由間接話法として認められるように思われる。(30)は比較のための作例である。

(29) ①ヒロシはひとりぼっち。②親のことも兄弟のこともわかりません。
③親のいない生きものはいませんから、親はいたと思います。④では兄弟はどうでしょうか。(『ヒロ』 p.228)

(30) 親のいない生きものはいませんから、親はいたとヒロシは思いました。

(29)の③では、伝達動詞が現在形で用いられている。③を主人公である犬の「ヒロシ」の内面の直接的表出として考えることも可能なようであるが、伝達部の「思う」は普通体ではなく、待遇表現の「ます体」で用いられているところに注目したい。この童話では、「ヒロシ」の思考や発話はほとんど普通体で引用されているところから見ると、「ます体」は

語り手によるものだと考えられる。しかし、(30)における伝達部は完全に語り手によるものであるのに対して、(29)の場合、伝達動詞の現在形から作中人物の視点を感じられる。すなわち、(29)における伝達動詞には作中人物の視点による現在形と語り手の視点による「ます体」が混在しているため、③は自由間接話法として解釈できる。

ちなみに、中国語の場合、語り手の視点と作中人物の視点の混在しているような伝達部が存在しない。2.2.2 で見たように、中国語の感情述語は客観性が強く、伝達部に感情述語が用いられても、そこに作中人物の視点を感じられないからである。

5. おわりに

本稿で明らかになったことをまとめると、以下のようになる。

地の文における引用文の伝達部が語り手と作中人物のいずれの視点によって語られたものかを考察することによって、当該思考・発話の部分の話法が分かる。伝達部は完全に語り手の視点によるものであれば、思考・発話の部分は直接話法または間接話法になる。伝達部が作中人物の視点によるものであれば、思考・発話の部分は自由直接話法になる。伝達部には語り手と作中人物の視点の混在していれば、思考・発話の部分は自由間接話法になる。

中国語の場合、時制を持たないことや伝達動詞の客観性が強いことなどにより、伝達部を持った自由直接話法や自由間接話法は存在しない。これに対して日本語には、少数ではあるが、伝達部を持った自由直接話法と自由間接話法が存在する。これは、日本語の思考表現や感情表現の主観性が高いことによる。

参考文献

- 鎌田修(2000) 『日本語の引用』ひつじ書房
- 工藤真由美(1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト——現代日本語の時間の表現——』ひつじ書房
- 讃井唯允(1988) 「中国語指示代名詞の語用論的再検討」『人文学報』198、東京都立大学人文学部中国文学研究室
- シュタンツェル, F.(1979) Franz K. Stanzel: *THEORIE DES ERZÄHLENS*. Verlag Vandenhoeck & Ruprecht, Göttingen, 1979. 前田彰一 訳(1989)『物語の構造——〈語り〉の理論とテキスト分析』岩波書店
- 砂川有里子(1987) 「引用文の構造と機能——引用文の3つの類型について——」『文芸言語研究 言語篇』13、筑波大学文芸・言語学系
- 砂川有里子(1989) 「引用と話法」『日本語の文法・文体(上)』講座日本語と日本語教育第4巻、明治書院
- 寺倉弘子(1995) 「『描出話法』とは何か」『日本語学』11月号、明治書院
- 寺村秀夫(1984) 『日本語のシンタクスと意味 第Ⅱ巻』くろしお出版
- 豊田昌倫(1993) 「伝達部の構造と機能」『近代英語の諸相』英潮社
- 中川ゆきこ(1983) 『自由間接話法』あぼろん社
- 原田寿美子(1991) 「中国語における発話の引用——『说』、『问』、『告诉』、『骂』、『叫』に関して」『名古屋学院大学外国語学部論集』3巻1号
- 藤田保幸(1986) 「文中引用句『～ト』による『引用』を整理する——引用論の前提として——」『論集日本語研究(一)現代編』宮地裕編、明治書院
- 藤田保幸(2000) 『国語引用構文の研究』和泉書院
- 保坂宗重・鈴木康志(1993)『体験話法(自由間接話法) 文献一覧——わが国における体験話法研究——』茨城大学教養部
- 松井三郎(1983) 「日本語における自由間接話法」『ÉTUDES FRANÇAISE』19、大阪外国語大学フランス語学科研究室
- 松木正恵(2001) 「引用と話法に関する覚書」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第47輯第3分冊
- 宮坂和江(1955) 「会話文と地の文」『国文学解釈と鑑賞』229、至文堂
- メイナード, 泉子・K(1997)『談話分析の可能性——理論・方法・日本語の表現性——』くろ

しお出版

- 山田良治(1957) 「現代作家と代行描写」『言語生活』72、筑摩書房
 劉月華・潘文娛・故韡(1983)《实用现代汉语语法》外语教学与研究出版社、1983 相原
 茂監訳(1996)『現代中国語文法総覧』くろしお出版
 申丹(1998) 《叙述学与小说文体学研究》北京大学出版社

例文出典

- 『晩年』: 『晩年の子供』山田詠美、『晩年の子供』より、1991、講談社
 『透光』: 『透光の樹』高樹のぶ子、1999、文芸春秋
 『トラ』: 『トラッシュ』山田詠美、文芸春秋、1991
 『紅茶』: 『冷めない紅茶』小川洋子、『冷めない紅茶』より、1990、福武書店
 『イン』: 『インストール』綿矢りさ、2001、河出書房新社
 『うら』: 『うらぼんえ』浅田次郎、『鉄道員』より、集英社文庫、2000
 『フル』: 『フルハウス』柳美里、『フルハウス』より、文芸春秋、1996
 『十三』: 『十三歳の夏(抄)』乙骨淑子、『現代童話Ⅱ』より、1991、福武文庫
 『ヒロ』: 『ヒロシ』三木卓、『新潮現代童話館 1』より、1992、新潮文庫
 《逝川》: 《逝川》迟子建、《清水洗尘》より、2001、中国文联出版社(『ナミダ』杉本達
 夫訳、『中国現代小説』第2巻20号より、2001、蒼蒼社)
 《永远》: 《永远有多远》铁凝、《午后悬崖》より、2002、华文出版社(『いつになったら』
 久米井敦子訳、『中国現代小説』第2巻23号より、2002、蒼蒼社)
 《土豆》: 《亲亲土豆》迟子建、《清水洗尘》より、2001、中国文联出版社(『じゃがいも』
 金子わか訳、『現代中国女性文学選作選 2』より、2001、鼎書房)
 《伤心》: 《伤心的舞蹈》苏童、《苏童文集一少年血》より、1993、江苏文艺出版社
 (『悲しみのステップ』堀内利恵訳、『中国現代小説』第2巻5号より、1997、
 蒼蒼社)
 《回廊》: 《回廊之椅》林白、《猫的激情时代》より、2001、中国文联出版社
 (『回廊の椅子』伊禮智香子訳、『中国現代小説』第2巻12号より、1999、蒼
 蒼社)
 《人啊》: 《人啊,人!》戴厚英、1999、安徽文艺出版社(『ああ、人間よ!(三)』大石

智良訳、『中国現代小説』第1巻3号より、1987、蒼蒼社)

《围城》: 《围城》钱钟书、1980、人民文学出版社(『結婚狂詩曲(上)』荒井健・中島
長文・中島みどり訳、1988、岩波書店)